

第2回 「曾我物語」

学芸員 海老沼真治

新型コロナウイルスの影響で、1月中の博物館のイベントがすべて中止となることが決まり、古文書講座も残念ながら中止となってしまいました。通常の講座の代わりとして、独自で学習できる資料を用意しましたので、ぜひ古文書・くずし字の学習にご利用ください。

1. 曾我物語（曾我兄弟の仇討ち）関連のできごと

今回はシンボル展「曾我物語凶屏風」にちなんで、曾我物語に関連する資料を読んでいきます。今年の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」でも、初回から物語に深く関わる人物がたくさん登場しています。シンボル展は大河ドラマを楽しむうえでも参考になると思います。

まず、曾我物語に関連するできごとを簡単に年表風にご紹介します。

安元元年（一一七五）、大河ドラマはこの年からスタートしました。この頃、後に曾我兄弟の仇となる工藤祐経（体中をポリポリと搔いていた人）は、一族の伊東祐親（「じさま」と呼ばれていた人）に所領を奪われ困窮し、祐親を恨んでいました。

安元二年（一一七六）十月、工藤祐経が従者に伊東祐親・河津祐泰（祐重・祐道とも）父子を襲撃させ、伊東祐親は難を逃れましたが、曾我兄弟の父である河津祐泰が殺されます。この時、兄一万は五歳、弟管王は三歳。幼くして父を喪いました。兄弟の生母はこの後、相模の曾我祐信と再婚しました。

治承四年（一一八〇）八月、源頼朝が北条氏とともに伊豆で挙兵、相模石橋山で平家方の大庭景親・伊東祐親らと戦うも大敗します。しかし勢力を挽回し、十月に駿河富士川で平家軍を破りました。伊東祐親は富士川合戦後に頼朝方に捕らえられ自害したといえます。一方、工藤祐経は頼朝の御家人として繁栄を遂げます。

元暦元年（一一八四）六月、物語からは離れますが、甲斐源氏一条忠頼が源頼朝に誅殺されました。頼朝は酒宴を開き、工藤祐経に忠頼暗殺を命じましたが、祐経は実行直前に緊張で顔色が変わって悟られそうになり、急きよ他の武士が暗殺を実行したといえます。またこの年の十月、曾我兄弟の兄一万が、

養父のもと十三歳で元服し、曾我十郎祐成を名乗りました。

文治元年（一一八五）三月、壇之浦合戦で平家が滅亡。十一月、曾我兄弟の弟菅王（十二歳）が、父母の勧めにより箱根権現に入門し、実父の菩提を弔っていましたが、同時に父の仇祐経への恨みも募らせていきました。

建久元年（一一九〇）九月、十七歳の菅王は箱根の山を抜け出し曾我の里に戻ります。そして兄祐成の手引きにより北条時政のもとで元服し、五郎時致を名乗りました。

建久三年（一一九二）七月、源頼朝が征夷大將軍に任じられ、鎌倉幕府が名実ともに成立しました。

建久四年（一一九三）五月、源頼朝が御家人を率いて富士山麓で大規模な巻狩りを行いました。なお、この巻狩には甲斐源氏の武田信光・小笠原長清も参加しています。

その最中の五月二十八日夜、曾我兄弟が工藤祐経の宿所を襲撃し、祐経を討ち取って宿願を果たしました。この直後、駆け付けた武士たちとの間で戦鬪となり、兄祐成は新田忠常に斬られて絶命します。弟時致も捕らえられ、翌二十九日に処刑されました。祐成二十二歳、時致二十歳のことでした。

2. 曾我物語を読む

曾我兄弟の仇討ちは、様々な形で語り継がれることとなり、鎌倉時代の終わりのころには『曾我物語』が成立したと考えられています。室町時代には能や幸若舞、江戸時代には歌舞伎などの演目となり、さらに浮世絵や絵本の題材としても取り上げられ、多くの人々に親しまれるようになりました。

今回の講座では、江戸／明治時代出版された、『曾我物語』をもとにした絵本類を読むことで、くずし字に親しむとともに、シンボル展見学の参考としていただければと思います。

読むのは「富士野牧狩」（当館蔵、歴-2005-003-004932）という絵本です。『曾我物語』のうち、建久四年の富士野の巻狩から曾我兄弟の仇討までの代表的な場面を、絵と文章で説明しています。この本は、絵が中心で文章はそれほど長くありません。字のくずしも比較的わかりやすいものです。虫損が多めで判読し難いところもありますが、初歩的な学習には良い資料です。

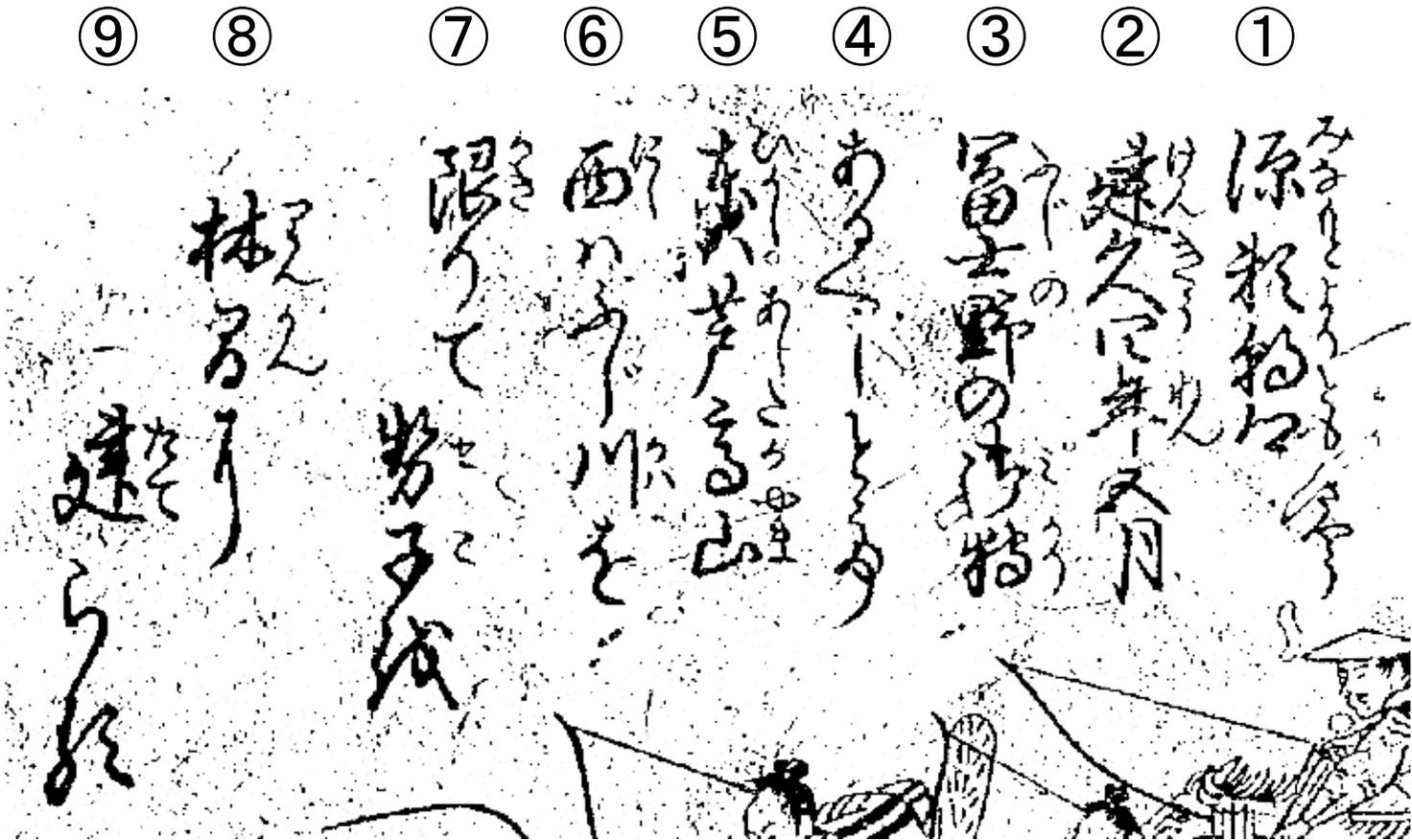
まずは最初のページをあげてみます。



源頼朝
 建久元年八月
 富士野の狩
 わるくとも
 新芦原山
 西の川を
 隔てて
 勢子成
 概
 建
 久



「富士野牧狩」の最初の見開きです。字は左上の四分の一に満たず、ふりがなも付いてるので、初めての方でも取り組みやすい文量だと思えます。まずは、翻刻文を左に示し、次ページでいくつかのくずし字の説明をします。



① 源頼朝卿
みなもとよりとよまさちやう

② 建久四年五月
けんきう ねん

③ 富士野の御狩
ふじの ミかり

④ あるへしとて

⑤ 東八芦高山
ひがし あしたかやま

⑥ 西八ふじ川を
にし かハ

⑦ 限りて勢子を
かき せこ

⑧ 林間に
りんかん

⑨ 建らる
たて

①「源頼朝卿」は、初めての方には少し難しくくずし方もありません。わからない字はあまり時間をかけず、先に進んで読めそうな字に取り組んでみましょう。ただし、ふりがなの「み」「よ」「と」などは、いまの平仮名とほぼ同じ形です。

②「建久」「年」「月」や、③「富士野」は、それほどくずさされておらず、わかりやすい字です。年月に入る「四」「五」は、くずし字辞典にも載るような典型的なくずし方で書かれていますので、ぜひ憶えておくようにしましょう。またふりがなも、③最後の「かり」以外はすべて現在と同じ平仮名・片仮名の字形です。

④はすべて平仮名で、「あるへしと」まではすべて現在と同じ字形です（画が一部省略されたものはあります）。最後の「て」だけが違う字です。これは後ほど説明します。

⑤少し難しいくずしが続きますが、最後の「山」はわかりますね。ふりがなも「ひ」「あ」「やま」などは現在と同じ字形です。「東」「高」は、よく使われるくずし方ですので、憶えておくようにしましょう。

⑥は漢字・かなともすべて現在と同じ字形です。ふりがなも「か」以外は現在と同じ字です。

⑦「限りて」は比較的わかりやすいと思います。「勢」は難しいかもしれませんが、下「力」が書いてあるとわかれば、まずは十分です（この「力」をたよりに、くずし字辞典で調べることになります）。「を」は後ほど説明しますが、前の行の「を」とは字形が全然違いますね。

⑧⑨「林」「建」は現在とほぼ同じ字形ですね。「間」は「つる」のように見えますが、典型的な「間」のくずし方です。ぜひ憶えておきましょう。両行の最後にある平仮名「に」「る」は、今の字とは全然違う形です。これも後ほどご説明します。

本文の大意は、「源頼朝卿が建久四年五月に富士野で御狩（巻狩）を行われ、東は芦高山（愛鷹山）まで、西は富士川までの林間に勢子（狩りの際に動物を囲んで追い立てる役目の人）を配置した。」となります。

いかがでしたでしょうか？

現在も使われている字に近い形で書かれているものが多くあり、初めての方でも読めそうな字が少なくなかったと思います。

一方で、現在の字とは異なる形で書かれた字もありました。漢字については、いわゆる「くずし字」なので、くずし字辞典などで調べながらくずし方を憶えていきます。仮名の場合は、くずし方を憶えるのに加え、「**変体仮名**」も学ぶ必要があります。

「**変体仮名**」とは、現在通用している仮名とは異なる形の仮名です。例えば平仮名で「あ」といえば、現在では漢字の「**安**」をもとにした字だけが使われますが、昔はこれだけでなく、「阿」「愛」「悪」など複数の漢字をもとにした字が用いられていました。現在、便宜的に決められた「あ||安」以外の漢字をもとにした仮名を「**変体仮名**」と呼んでいるのです。

4ページの本文中には、以下の**変体仮名**がありました。

④あるべしと「**て**」…これは「**亭**」がもとになっています。

⑦限りて勢子「**を**」…これは「**越**」がもとになっています。

⑧林間「**に**」…これは「**耳**」がもとになっています。

⑨建ら「**る**」…これは「**類**」がもとになっています。

これらはいずれもくずし字辞典に用例が載っていますので、辞典をお持ちの方はぜひ調べてみてください。

また、⑥⑦の最後の字はいずれも「**を**」ですが、⑥は「**遠**」をもとにした現在一般に用いられる字です。このように、一つの文の中でも、異なる字・異なるくずし方で書かれることがあります。

ふりがなに目を向けると、③「かり」、⑤「ひがし」「たか」、⑥「かへ」、⑦「かき」、⑧「りんかん」で、変体仮名が用いられています。このうち「か」は、いずれも平仮名の「う」のように書かれています。これは「可」をもとにした字で、江戸時代には「か||加」と同じか、それ以上によく用いられた字といっても良いでしょう。「た」は「多」、**「り」**は「里」の字が、それぞれもとになったものです。

また、平仮名は漢字をくずした字が用いられますが、それがそのまま漢字として用いられることもあります。ですから、平仮名・変体仮名を憶えると、憶えた字の数だけ漢字を憶えたことにもなるのです。

あとは、個人的な学習方法になりますが、①「源頼朝」の「頼」と、⑨「建らる」の「る||類」を見比べてみると…



画像が不鮮明なところもありますが、「頼」「類」ともに、つくり「頁」の字が用いられています。どちらも、同じようなくずし方で書かれているのがおわかりいただけますでしょうか。

この2文字に限らず、他に「頁」をつくりに書く字（順・願・頭など）も、同じようなくずし方で書かれることがあります。くずし字は、たとえわからなくとも、部首など部分的にわかれば、そこからくずし字辞典で調べるなどすることができます。

こんな感じで、わからない字に出くわした時は、他に同じ形の字はあるか、部分的にわかる字はあるか、といった視点で調べてみることも良いかもしれません。ただし、この方法が最良というわけではないので、皆さんが学びやすい方法をさがしてみてください。

長くなりましたが、次のページに進みましょう。このページは、上3分の1くらいのスペースに本文があり、文字も大きめですので、読みやすいと思います。



【課題1】右ページの③行目以降に書かれている字を読んでみましょう。

①

あいかう
愛甲三郎

①

あいかう
愛甲三郎

②

すへたか
季隆ハ



②

すへたか
季隆ハ

③

きんもき
情素素の



③

④

ゆ
弓

④

⑤

の

⑤

⑥

作

⑥

⑦

あり

⑦

⑧

きんもき
情素丸

⑧

⑨

しん
生銀

⑨

⑩

たごやめ

⑩

⑪

おきり
大鹿公

⑪

※まずは本文から。できる方はふりがなにも挑戦してみてください。
※わからなければ無理に時間をかけず、飛ばして先を読み進めてください。

①

愛甲三郎

①

愛甲三郎
あいかう

②

季隆ハ

②

季隆ハ
すへたか

③

幡寿君の

③

幡寿君の
まんしゆきみ

④

弓

④

弓
ゆみ

⑤

の

⑤

の

⑥

師

⑥

師
し

⑦

なり

⑦

なり

⑧

幡寿丸

⑧

幡寿丸
まんしゆまる

⑨

生年

⑨

生年
しやうねん

⑩

十三才にて

⑩

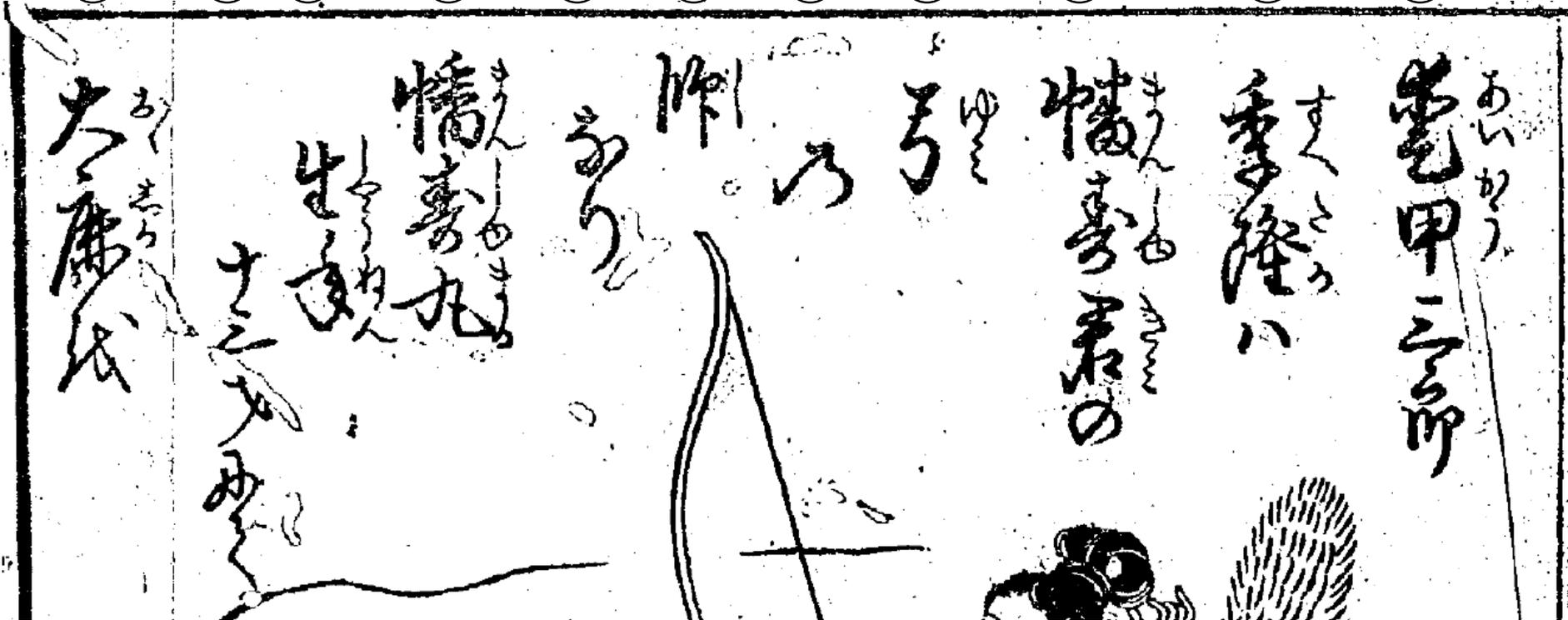
十三才にて

⑪

大鹿を

⑪

大鹿を
おししか



いかがでしたでしょうか？

③はいきなり難しい字が出てきたように見えますが、実は⑧にも同じ字が書かれています。気づきましたか？⑧の方がより読みやすいと思いますが、一文字目は「幡」、二文字目は「寿」とあり、この二文字で人名「幡寿（万寿）」すなわち源頼朝の長男の幼名です。③にはその下に「君の」と続きます。

⑤は「乃」と書かれています。ここは漢字として読むのではなく、平仮名「の」として読みます。③の「の」と書き方が異なりますが、③も「乃」をくずして書いたものです。

⑥「師」は少し難しいくずしになっていますが、よく使われますので、この形で憶えておくとういでしょう。⑦「なり」は今の平仮名と同じ字形です。

⑧「幡寿」の下は「丸」ですね。ほとんどくずさずに書かれています。⑨は「生年」、初めての方には難しかったかも知れませんが、どちらも典型的なくずし方で書かれており、よく使う文字ですので、ぜひ憶えておきましょう。

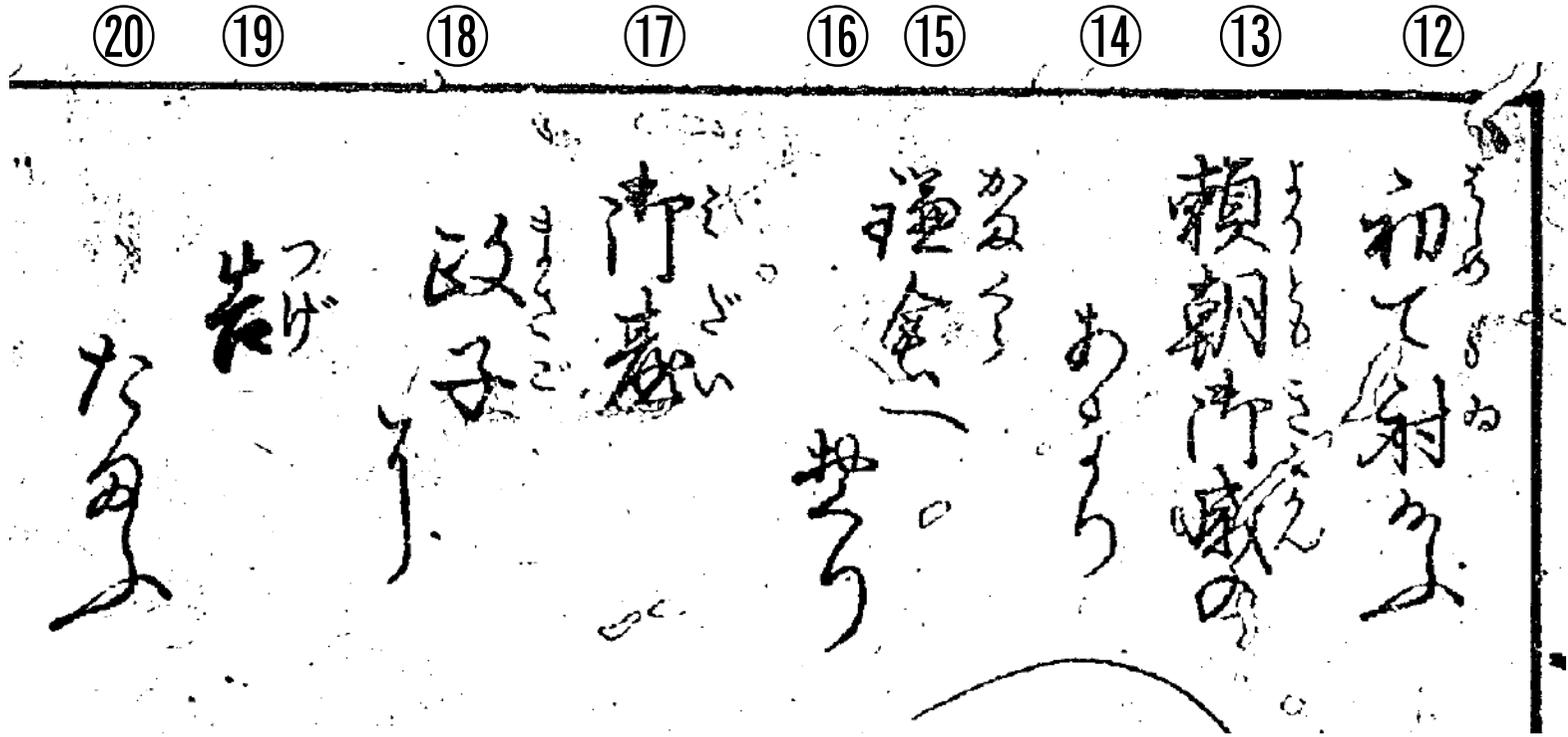
⑩「十三」はそのまま読めると思います。「才」も少し傾いていますが、今の字と変わりません。その下は平仮名二文字で「にて」となります。「に」は「丹」をもとにした変体仮名。「て」は「天」をもとにしたもの、つまり今の「て」と同じ字なのですが、くずし方によって違う字に見えてしまいますね。

⑪一文字目の「大」は今と変わらない書き方ですね。次の字は「鹿」、分り難かったかもしれませんが、左ページの挿絵から「鹿かな？」と推測して辞書で調べるという方法もアリです。最後の文字は「を」、前に説明した文字だとお気づきになりましたでしょうか？

※ふりがなについては、ほとんどが今と同じ字形・前に説明した変体仮名が書かれています。一つだけ、⑩「鹿」のふりがな「しか」の「し」が、「志」をもとにした変体仮名になっています。

続いて、左ページの解読に挑戦してみましよう。

【課題2】左ページの⑬行目以降に書かれている字を読んでみましょう。



⑫ はしめ ゐ
初て射給ふ

⑬

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

⑳

※まずは本文から。できる方はふりがなにも挑戦してみてください。
※わからなければ無理に時間をかけず、飛ばして先を読み進めてください。

⑫

初て射給ふ

⑫

初て射給ふ
はしめ る

⑬

頼朝御感の

⑬

頼朝御感の
よりともしきよかん

⑭

あまり

⑭

あまり

⑮

鎌倉へ

⑮

鎌倉へ
かまくら

⑯

おくり

⑯

おくり

⑰

御臺

⑰

御臺(臺・台)
ミだい

⑱

政子に

⑱

政子に
まさこに

⑲

告

⑲

告
つげ

⑳

たまふ

⑳

たまふ

いかがでしたでしょうか？

⑬ 「頼朝」は最初に読んだ文にも出てきましたが、こちらの方が読みやすい形で書かれています。「御」は⑰にもほぼ同じ形の字があることに気づきましたか？「感」は少し難しいですが、今のように「心」を下に大きく書かず、「口」の下に控えめに書く「感」の形が一般的でした。

⑭ 「あまり」は全て今と同じ字形の平仮名です。「ま」の一部に虫損があり、文字が途中で切れています。

⑮ 「鎌倉」は、初めての方は読めなくても仕方ないレベルのもので。ただし、「鎌」のかねへん「金」のくずしは、よく使われるくずし方ですので、憶えておくとよいでしょう。⑯ 「おくり」は全て今と同じ字形の平仮名です。

⑰ 「墓」も難しい字ですが、「台」の旧字体のひとつです。まだ読めなくても仕方ないレベルの字です。ただ、⑱の「政子」が読め、頼朝の妻北条政子のことだとわかり、頼朝のような身分の高い人の妻のことを「御台所」などと呼ぶことを知っていれば、推測できるかもしれません。歴史上の知識があれば、読めなくすし字があっても、このように推測することが可能となります。⑲の最後「に」は、前に説明した字ですね。

⑲ 「告」は漢字も読めそうですし、ふりがなもはっきりと書いてあります。⑳ 「たまふ」の「ま」は「満」がもとになった変体仮名です。「た・ふ」は今と同じ字形ですね。

※ふりがなは今と同じ字形か、前に説明した変体仮名で書かれています。

【課題1・2】で読んだ本文の大意です。

「御家人の愛甲三郎季隆は、頼朝の子息幡寿（頼家）君の弓の先生（を務めるほどの弓の名手）である。幡寿丸は十三歳にして巻狩で大鹿を初めて射止めた。頼朝は大変感心し、この鹿を鎌倉に送って、妻の北条政子に幡寿の手柄を伝えた。」

※源頼家はこの時十二歳でしたが、本資料では十三歳となっています。

今回の説明は以上です。

最後に腕試し問題をあげておきます。お題は、同じ「富士野牧狩」からです。今まで読んできたのは、富士野の巻狩りの前半の様子でしたので、いよいよ曾我兄弟が仇討を実行するあたりの2つの場面を読んでみてください。

【腕試し1】次ページをご覧ください。



【腕試し1】②行目以降に書かれている字を読んでみましょう。

工藤

① 工藤
くどう

秋の

②

遊み

③

弓矢つ

④

秋の

⑤

木の

⑥

つ

⑦

お

⑧

ひま

⑨

秋の

⑩

の

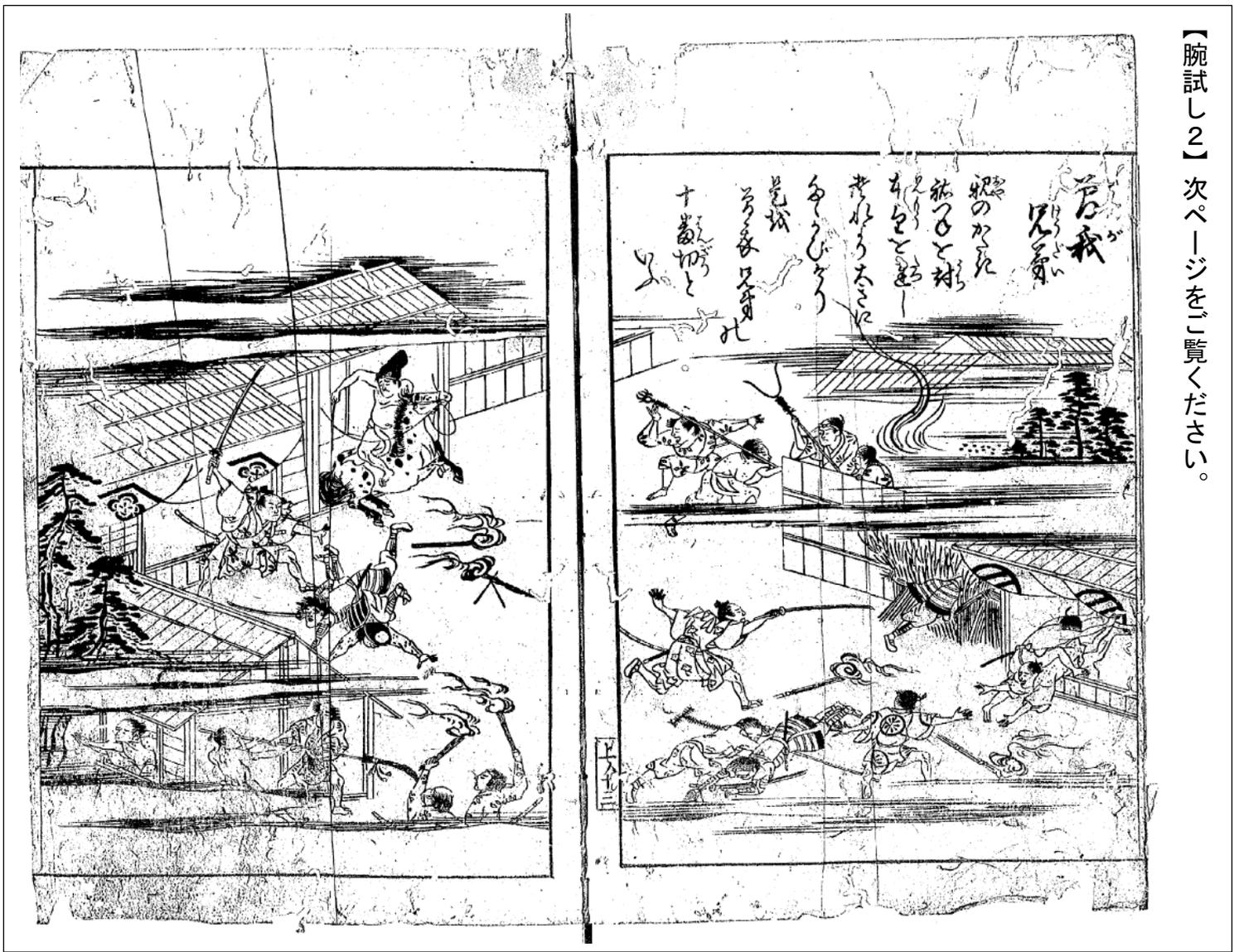
⑪

⑬

⑬

もう一問、ついに曾我兄弟が仇討の本懐を遂げる場面からです。

【腕試し②】次ページをご覧ください。



【腕試し2】③行目以降に書かれている字を読んでみましょう。

①

曾我

①

曾我 そが

②

兄弟

②

兄弟 けうだい

③

親のかた

③

④

結つと対

④

⑤

本とと

⑤

⑥

昔はうた

⑥

⑦

多しひ

⑦

⑧

是城

⑧

⑨

兄弟

⑨

⑩

十

⑩

⑪

兄弟

⑪

どちらも虫損が多く、画質も荒くて読みづらいところもありますが、今回学んだくずし字も多く書かれています。前の問題とも見くらべながら、また話の流れなどから推測しながらでも構いませんので、少しずつ読んでみてください。

【腕試し1・2】の解答例は、後日博物館のHP・ツイッターに掲載しますので、[答え合わせ](#)をしてみてください。

最後に、曾我物語を読むうえで参考となる図書をご紹介します。

(テキスト)

日本古典文学大系 88 『曾我物語』(岩波書店、一九七八年)
新編 日本古典文学全集 53 『曾我物語』(小学館、二〇〇二年)
穴山孝道校訂 『曾我物語 上・下』(岩波文庫、一九九六年)

(一般向けの概説)

坂井孝一 『曾我物語の史実と虚構』(吉川弘文館、二〇〇〇年)
坂井孝一 『曾我物語(物語の舞台を歩く)』(山川出版社、二〇〇五年)

※ここにあげた図書は、いずれも現在書店での取り扱いがないものだと思います。図書館や古書店等で探してみてください。

参考図書の著者坂井孝一氏は、大河ドラマの時代考証を務められており、鎌倉幕府に関する図書も多数出されていますので、あわせてご覧ください。
博物館の資料閲覧室でも、曾我物語の関連図書を紹介していますので、ご来館の折にはお立ち寄りください。本講座で読んだ「**富士野牧狩**」も、室内の専用端末で検索・画像の閲覧ができます。

閲覧室の開室時間は午前9時～12時、午後1時～4時です。

今回の講座は以上です。

最後までお付き合いいただきありがとうございました。